1
エロスは或る種の神なのだろうか、ダイモーンなのだろうか、魂の情念の一種なのだろうか

それとも、或るエロスは一種の神かダイモーンであるが、別のエロスは何らかの情念でもあるのだろうか

なお、そのはあいのエロスは、それぞれどのような神、ダイモーン、そして情念なのだろうか。エロスについて、このような問題を考えていくにはあいには、広く世のんびとにいきわたっている見解にかりてなく、これらに関する哲学上の諸見解、なかでも神のようなプラトンの見解を吟味しながら考察していくのが妥当であろう

プロティノスのプラトンに対する尊敬

さて、われわれがエロスの所為とする情念については、これが或る美しいものと一体になりたいとねがう魂のなかに生じるということを知らない者は、おそらくだれもいないだろう。また、この欲求には二通りあって、その一つは美そのものと親しくしている思慮深き人から生じ、他は或る種の見苦しい行為を成し遂げることによって終わることをねがう欲求であるということも、おそらく知らない者はいないだろう

いうまでもなく、プラトンはその作品の多くの個所でエロスの問題にふれ、いろいろなことを書いているが、その際、彼はエロスを魂のなかに生じた情念の一種であるとのべているだけでなく、またこれをダイモーンとも呼び、その起源にかれて、どのようにしてどこから生じたのかを詳しく論じているのである

だが、ここで、情念としてのエロスが右のそれぞれのはあいには、どこにその起源をもっているのか、その源をたずねることから始めるのが哲学的に考察するうえで望ましいことだろう

われわれの魂には、もともと美そのものに対する欲求があるが、その美そのものに対する欲求や認知を、そしてさらには魂と美との親族関係や美に対する魂の理屈めきの同族意識を情念としてのエロスの起源とみなすなら、人はそのエロスのまことの原因を言い当てていると、私には思えるのである

なぜなら、醜は自然にも神にも反しているからである。つまり、自然は美しきものを見てつくり、規定されたも(τὸ ὡρισμένον：ト・ホーリスメノン)のに注目するわけで、この規定されたものが「善きものの系列(アリストテレス『ニコマコス倫理学』I6,1096b6)」に属するのに対して、無規定なるもの(τὸ ἀόριστον：ト・アオリストン)は醜く、別の系列に属するのである

だが、人は、自分が称賛したり親しい間柄にあるものの似姿に対しても、愛著をもつものなのである

それに自然は、その起源をあの知性界にもっていて、善きものから、そして美しきものから生じたものなのである

もし人がこの原因を否定するなら、どのようにして、またいかなる原因によって情念が生じるのか、説明できなくなるだろう、愛しあうものたちがたがいに契りを求めあうはあいについても、その理由を説明できなくなるだろう

とはいえ、しかし、この感性界で意志とより心を動かされる者たちは、この感性界の美つまり似像や肉体に魅る美をもつことで満足しているのである

つまり、愛する者たちは「美しきもののなかに産むこと」をねがうわけで、もしそうでなければ、自然は美しきものを作りだそうとしながら、醜きもののなかでこれを産もうとしているという、不合理なことをしていることになるだろう

しかし、その似像や肉体には美の原型がそなわっているわけではないのであって、彼らがたとえ感性界の美とはいえ、これを愛するようになるのは、この原型こそが原因なのである

それゆえ、彼らがこの感性界の美からあの知性界の美を思い起こすはあいには、この感性界の美を似像として愛するのであるが、知性界の美を想い起こすことがないはあいには、その情念を知らないので、この感性界の美を真実のものと思ってしまうのである

それに、彼らがこの感性界の美に愛着をもっていても、思慮深くふるまうなら過ちを犯すことはないが、交わりの深みに落ちこんでしまうと、過ちを犯すことになるのである

なお、美しきものに対する愛の純粋な人は、想起するとかしないとかにかかわりなく、ただ美だけで満足するが、死すべきものとして生を受けながら、そのうえ肉体であるにもかかわらず、知性界の美を想い起こすことがないはあいには、その情念を知らないので、この感性界の美を真実のものと思ってしまうのである

彼は永生不死を求めて種を蒔くのであるが、永生不死なるものは美しきものとの同族の間柄にあるから、美しきもののなかに種を蒔くのである

というのも、事実、永遠なるものは美しきものとの同族の間柄にあり、永遠なるものは第一義的な意味において美しく、それから派生したものもすべて美しいからである

それゆえ、産出することを望ましいものは、それだけ美に対する自らの満足も大きいことになるが、作ろうとするものは自分に足らざるところがあり、自分だけでは十分でないから、美しきものを作ろうとするのである

そして、美しきものを作ろうとしているのであるから、美しきものなかで産めばよいと考えるのである

しかしながら、とにかく、美しい肉体を交わりゆえにではなく、美しいという理由のみで愛する人びとも、われわれが混じり合った愛と呼んでいる愛に惹かれる人びとも

しかしながら、とにかく、美しい肉体を交わりゆえにではなく、美しいという理由のみで愛する人びとも、われわれが混じり合った愛と呼んでいる愛に惹かれる人びとも

ともに節度のある正しい道を歩んでいることに変わりはない

——しかし後者が感性界の美こそ尊ぶべきものであるとみなし、これに満足しているのに対して、前者すなわち知性界の美を想起している人びとは、その知性界の美を尊敬するとともに、感性界の美も、これを知性界の美の産物であ模造玩具であると考えて、軽く見ることはしないのである

——だから、これらの人びとは醜さにとらわれることもなく、美を愛しているのであるが、しかし、美を愛するがゆえに醜さのなかに落ちこんでしまう人びともいるのである

——後者のはあい、永続性を得るために、その愛は婦人に向けられるのであって、相手が美しい婦人でなければ、彼らの目的は失敗に終わってしまうのであり、前者の方がすぐれているのであるが——

というのも、事実、善きものへの欲求が、しばしば人を悪しきものに陥れてしまうことがあるからである

魂の情念については、以上で私の話を終えることにしよう

2
他方、世間一般の人びとはかがりでなく、神々のことに詳しい人びとやプラトンもともに神とみなしているエロスについて

——プラトンはしばしば「アプロディテの子としてのエロスの話をし、これが、「美しい子供たちの守り神」の役目をしているとか、魂を刺激して知性界の美に向かわせる働きをするとか、魂がすでにもっている知性界への衝動を大きくするのが仕事であるとのべて、このエロスを神とみなしているのであるが——

とりわけこのエロスについて、哲学的に考察していかねばならない

それにまた彼は『饗宴』のなかで、エロスはアプロディテから生まれたのではなく、「ペニアを母としポロスを父として、アプロディテの誕生祝いの日に生まれた」と述べているが、このことば取り上げる必要があるだろう

だが、議論の筋道からすれば、とにかく、エロスがアプロディテから生まれたと言われたと、アプロディテと一緒に生まれたと言われたと、アプロディテについても、若干の議論がなされる必要があるように思う

それでは、われわれはアプロディテには二通りある と主張する

そこで、まずはじめに、アプロディテとは、どんな女神なのか、その後で、エロスがどうしてこの女神から生まれたのか、同じエロスがどうしてこの女神から生まれると同時に、またこの女神と一緒に生まれたりもするのか

すなわち「ウラノスの娘」と称される「天上のアプロディテ」と「ゼウスとディオネの娘」としてのアプロディテがそれで、後者はこの世の結婚の守り神として、これを司る女神である

しかし、前者は「母なくして生まれた女神」で、結婚を超えたからたの世界の女神である

というのも、天上の世界には結婚がないからである

なお、この天上のアプロディテはクロノスの娘と言われているが、クロノスとは知性のことであるから、彼女はもっとも神的な魂に相当することにならなければならない

すなわち、天上のアプロディテとしてのこの魂は離れた或る種の実在であり、素材にあずかることのない真実在だから——彼女が「母なくして生まれた女神である」というように説明することなど語られるのは、実はこの事実に基づいているのだが——もとも下方の世界に向かうことはないのである

というのも、この魂は汚れのない知性から直接に汚れのないものとして生まれ、この感性界に降下することを望みもしないし、降下できもしないのであって、たえず上方の世界にとどまっているからである

だから、人はこの魂をダイモーンと呼ばずに、神と呼べば正しいであろう。なぜなら、この魂は混じり合わず、それ自体で清らかさを保っているからである

かくして、天上のアプロディテはクロノスにしたがいながら——あるいはもしよければ、クロノスの父ウラノスにしたがいながら、と言ってもよいのだが——クロノスに働きかけ、彼と親しくなって恋にとりつかれ、エロスを生み、エロスとともに、クロノスを観るのである

すなわち、アプロディテの働きかけが或る種の実在、真実性を作ったのであり、両者つまり母神アプロディテも美男エロスもともにあの知性(クロノス)へと目を向けるのであって、エロスは常に他の美しいものに惹かれるように定められている実在であり、いわば恋い慕う者と慕われるものとの仲介者という点に、その存在(の意義)を得ているのである

すなわち、エロスは恋い慕う者の眼として、恋する者が自分を通して恋慕の対象を見ることができるようにしてやるわけであるが、エロス自身は先にたって走りながら、恋する者に器官で見る力を与える前に、美しい観ものに満たされているのである

しかし、エロスの方が先に観るといっても、それは恋する者と同じ仕方によるのではない。エロスは恋する者に観るものをしっかりと固定してやるのだが、エロス自身は、自分のそばを通り過ぎる美の光景を観て楽しんでいるのである

3
エロスは実在であり、真実在から生まれた真実在であって、エロスを作った真実在にくらべると劣ってはいるが、真実在であることにかわりはない。人はこの事実を疑ってはならぬ

すなわち、あの高度の魂も自己以前の活動から、つまり存在界の真実在から生まれた真実在だったのであり、自分でも第一位の真実在としてのあのものを観、しかも熟烈に観ていたのである

そして、これ(知性)がその魂にとっての最初の観ものだったのであって、魂にとっては自分にとって善きものとして観たのであり、観ることに悦びを味わったのである

すなわち、この観ものは「ホラシス(見る働き)」によるからである

だから魂は、一種の快適な気分を味わいながら全力を集中して熟烈にこれを観照し、そのようにすることによって、自分で自分とその観ものにふさわしいものを生んだのである

それゆえ、エロスは観ものをめぐって熱烈に活動している魂の力と、観ものからいわば流出したもの(『クラテュロス』420a9)から、満たされた眼として生まれたのであって、それは見る働きが影像を伴っているのに似ているのである

「エロス」の動詞(エラーン)と「見る働き」の動詞(ホラーン)との類似性

そして、おそらく愛のもつ呼び名も、おそらく、ここからきているのだろう。エロスが存在を得るのは「ホラシス(見る働き)」によるからである

[つまり、情念としての愛(エロス)は、その呼び名をこのエロスから得ているのである。なぜなら、真実在は真実在でないものより先にあるからであり——とはいっても、この情念も「エラーン(愛)」と呼ばれるのだが——また人は「特定の人物へのエロス(愛)が彼をとらえる」とは言うけれども、何の制約もつけないで、「エロス(愛)が…」とは言わないからでもある]

というのも、このエロスは高度の魂の従者で、その魂から、その魂によって生まれ、神々を観ることだけに満足をおぼえるものだからである

——たえわれわれがこの魂を「ウラニア(宇宙の魂)と呼ぼうとも…、である、なぜなら、(われわれのうちの最善なるものはわれわれわれを離れた高所にあるとみなしているからである——

だが、われわれは、「この宇宙を最初に照らす高度の魂は、(この宇宙を離れた)高所にある」と言っているのだから、このエロスも、離れた高所にあるとみなさなければならない

したがって、われわれは、「このエロスの居処は、清浄なる魂の住むあの知性界だけにある」と考えなければならない

だが、この宇宙も魂をもっていなければならないのだから、同時にまた、その魂にしたがう別のエロスも存在していることになるだろう

そして、このエロスも上位のものに対する欲求をもっているのだから、その限りにおいて若者たちの魂を刺激するとともに、また自分の付き添っている魂も、もともと知性界の真実在を思い出すように生まれついているのだから、その限りにおいて、その魂をも上方の世界へと向かわせるのである

4
すると、はたしてそれぞれの魂も、真実在として存立しているようなエロスをもっているのだろうか

しかし、このエロスは各人に付き添っていると言われるダイモーン、すなわち各人ひとりひとりのもつエロスだということになるだろう

してみると、そのエロスが各人に付き添っていると言われるダイモーン、すなわち各人ひとりひとりのもつエロスだということになるだろう

それゆえ、全霊は普遍的なエロスをもち、部分霊はそれぞれ自分にふさわしいエロスをもっているとしなければならない

しかし部分霊は、それぞれがばらばらに切り離された状態で全霊に関係しているのではなく、そのすべてが一体となって全霊のなかに含まれているのだから、その限りにおいて、部分的なエロスのそれぞれも、普遍的なエロスに対して、同様の関係にあることになるだろう。

そして、さらに、その一つのエロスがこの宇宙万有の自分の好むところならどこにでも現れたり、その気になればいつでも自分のいろいろな部分にふさわしい姿をとって現れたりして、多様なエロスとなり、かつ多様なエロスとして存在しているのだ、ということにもなるだろう

だが、人は、「この全体者にはアプロディテもたくさんいて、エロスと一緒にダイモーンとして、この世界に現れている。そして、それらのアプロディテは、或る普遍的なアプロディテから流出したもので、多くの部分的なアプロディテとして、それぞれにふさわしいエロスをひきつれながら、その普遍的なアプロディテに依存している」と考えなければならない

<魂>はエロスの母であるが、アプロディテとは<魂>のことであり、エロスとは善きものを求める魂の活動のことだからである

してみると、このエロスはそれぞれの魂を善きものに導く働きをするものであって、高度の魂にしたがうエロスは、常に魂を善きものに結びつける神であり、混じり合った魂にしたがうエロスの方がダイモーンである、ということになるだろう

5
だが、その<エロスとしての>ダイモーンというものは、どのようなものなのだろうか

それに一般的に言って、ダイモーンというものは、どのようなものなのだろうか

プラトンの『饗宴』にもこのダイモーンというもののことが述べられており、そこでは、ほかのダイモーンとともに、ほかならぬこのエロスというもののことにもふれて、「ペニアを母とし、メティスの子ポロスを父として、アプロディテの誕生祝いの日に生まれた」というふうに述べられているのだが…

だが、「プラトンはこのエロスということばで、この(感性的)宇宙のことを言っているのであって、この宇宙の一員としてそこに生まれたエロスのことを言っているのではない」と推定することは、多くの矛盾する考えを含んでいる

「この宇宙は幸福な神であり、自ら満ち足りたものである」とのべているプラトンその人が、他方では、「このエロスは神でもなければ自足的でもなく、いつも不足をおぼえているものである」という考えを認めているからである

それに、また、もしこの宇宙が魂と肉体からなっていて、プラトンにとっては、アプロディテがこの宇宙の魂であるとすると、そのアプロディテはエロスの最も重要な部分である、ということにならねばならない

そうはとらないで、人間の魂が人間であるように、宇宙の魂(としてのアプロディテ)がすなわち宇宙であるとすると、エロスがすなわちアプロディテである、ということにならねばならない

それに、また、なぜ、このダイモーンとしてのエロスはこの宇宙であるのに、ほかのダイモーンは

——というのは、明らかにほかのダイモーンも、同じ真実在から成り立っているからだが——

それ自体がまた宇宙でもないのだろうか

この宇宙はいろいろなダイモーンの寄せ集めになってしまうだろう

なお、「美しい子供たちの守り神」と称せられるエロスが、どうしてこの宇宙なのだろうか。それに、「夜具もものべず、はだしで、無宿者のエロス(『饗宴』203d1)」をどうすれば不足なくびったりとあてはめることができるのだろうか

5
それでは、しかし、エロスとその物語をどのように解釈すべきであろうか

いまでもなく、ペニアとは何者で何のことなのかを理解し、この両者がどうしてエロスの親としてふさわしいのかを見ていく必要がある

しかし、その両者はまた、明らかに、ほかのダイモーンたちの親としてもふさわしいということにならざるをえないだろう

それぞれの神霊がダイモーンという共通の名前で呼ばれているだけのことならいざしらず、そうでなければ、ダイモーンはダイモーンである限り、どれもみな一つの本性と実体をもっていなければならないからである

そこで、たとえわれわれが「ダイモーンも神である」と言うことも稀ではないとしても、とにかく、このダイモーンと神が別の種族に属していると言うはあいには、いったいどのようにして神やダイモーンから区別されはいのか、この点を理解しておくことから始めよう

さて、われわれは、『神々の種族は情念からの自由である』と主張し、かつこれを信じてもいるが、「ダイモーンは神々に次くもので、永生不死ではあるけれども、神々とわれわれ人間族との中間に位置するものであって、すでにわれわれの方に傾いている」と主張し、ダイモーンたちには情念を帰属せしめているのである

では、ダイモーンたちは、どうして無情念の状態にとどまらなかったのだろうか。どうして劣ったものに向かって降下するのを、その本性としたのだろうか

それにまた次の問題も、すなわち「知性界にはダイモーンはまったく存在せず、逆に、この宇宙にはダイモーンのみが存在し、神の存在は知性界に限られるのか。

それとも、『神々はここにも存在する』のであって、常々われわれが言っているように、この宇宙は「第三位の神」であり、月より上にあるものはそれぞれが神なのである」という問題も、調べる必要がある だろう

だが、知性界にあるものはいかなるものもダイモーンと呼ばない方がよい

たとえそこにダイモーンそのもののがあるとしても、それも神であると言った方がよいし、それにまた、この感性界で月より上にある可視的な神々は第二義的な意味での神々で、知性界の神々にしたがいながらこれに順応し、星々をめぐる輝きのように、これに依存しているのである

だが、ダイモーンたちについては、何と言えばよいのだろうか。はたしてそれらは、魂が宇宙に降りてきた時に残した<それぞれの魂の痕跡>なのだろうか。もしそうなら、なぜ、この宇宙に降下した魂の痕跡だけがダイモーンなのであろうか

清浄な魂が生むのは神であり、その魂の子エロスは、すでに述べたとおり、神だからである

宇宙魂を魂と呼ぶ場合もあるので混乱する

さあ、それでは、まず、はじめに、なぜ、すべてのダイモーンをエロスとみなすわけにはいかないのだろうか

それに、どうしてダイモーンたちも素材から清浄ではないのだろうか

魂の善美なるものへの思慕から生まれたダイモーンはエロスであって、感性界の魂はすべてこのダイモーンを生むのである

だが、これに対して、ほかのダイモーンたちも魂から生まれたことはたかわりはないが、それらのダイモーンは宇宙の魂から生まれたのである

そして、この宇宙の魂が宇宙全体の必要に応じて別の力(善美への思慕ではなく)によって生んだこれらのダイモーンは、この宇宙を完全なものとするのに貢献し、宇宙と力を合わせて、そのなかにある個々のものを支配する のである

それというのも、宇宙の魂がこの宇宙に十分に寄与するためには、どうしてもダイモーンという力を生む必要があったのであり、それらの力がまた、宇宙の魂自身の全体性を維持するうえに役だっているからである

だが、それらのダイモーンは、どのようにしてどんな素材にあずかるのだろうか

というのも、それらのダイモーンがあずかるのは、たしかに物体領域の素材ではないからである

——もしそうでなければ、ダイモーンたちは(われわれ人間やほかの動物たちのように)感性的な生きものであることになるだろう——

というのも、たとえダイモーンたちが空気や火からなる身体をとるにしても、物体を分有しうるためには、それ以前に物体はもちがったものをその本性としていなければならないからである

なぜなら、まったく清浄なのは、物体とじかに混じり合うことはないからである

しかし、物体との混合を可能にするならんからの原因がないとすると、或る存在は物体と混じり合い、別の存在は物体と混じり合わないということが、なぜ起こるのだろうか

もっとも、多くの人びとにはダイモーンはダイモーンである限り、その存在は空気であれ、なんらかの物体を伴っていると思われているのである が…

では、その原因となっているものは何だろうか。人はここに知的素材を想定し、それに関与したものが、それを通じてこの感性的な物体の素材のもとにやってくるとしなければならない

7
だからプラトンも、エロスの誕生の物語のなかで、「まだ炎から酒がなかった頃のことなので、ポロスはネクタルに酔った」と語っているのであって、これは次のような考えに基づいて言われていると解してよい

すなわち、「エロスは感性界よりも先に生まれていた。そしてペニアは知性的なものを分有するのであって、知性的なもの影像を分有するのでも、知性界から映しだされたか影を分有するものでもない

つまり、ペニアは知性界に生まれていて(ポロスと)一緒になり、形相と無規定からなるものとしての

エロスという存在を生んだのである

それゆえ、ロゴスがロゴスならざるもの、つまり無規定な欲求で満ちとした存在であるもののなかにはいってきて、完全でも十分でもなく不足だらけのものの生み、かつ作ったことになる

——魂は善を得る前に、この無規定をもっていたのである。もっとも、その魂は無規定で限度のない漠然とした幻影によって、なにかがあると予知していたのであるが——

というのも、それは無規定なる欲求と十分なるロゴスから生まれたものだからである

それにまた、このようにして生まれたエロスは、自分のなかに無規定で非ロゴス的な限りのない欲求をもっているのだから、清浄なロゴスでもない

このエロスは自らのうちに無規定なるものの本性をもっている限り、決して満ち足りることはないからである

そして、このエロスは、魂を自分の源として、それから生まれてきたのだから、その魂に依存しているけれども、<自己自身にとどまらないで、無規定性と混じり合った>ロゴス

——ただし、ロゴスそのものが無規定生と混じり合うのではなく、そのロゴスから派生したロゴスが無規定性と混じり合うのであるが——

から成り立っている<混じり合ったもの>なのである

それに、このエロスは針(『パイドロス』240d1)のようなもので、困窮者たることをその本性としているのである

だから、たとえ自分のめざすものを手に入れても、なお困窮しているのである。すなわち混じり合っているものは満足しうることがないので、エロスも満足を得ることができないわけである

なぜなら、すでに自らの本性において満ち足りているものだけが、はんとうの満足を得るからである

だが、これに対して、エロスは窮乏と同居していながら欲求するのであって、たとえ一時的に満たされることがあっても、それを持ちつづけることはしない

つまりエロスは、一面では、生来の窮乏ゆえに満足を得る手段をもたないのであるが、その反面、ロゴスの本性をもっているので、足りないものを手にいれる才智にたけたものでもあるわけである

しかしわれわれは、およそダイモーンの種族に属するものはすべてこのような性質をもっており、このような性質をもった親から生まれ出ていることを認めなければならない

すなわち、それぞれのダイモーンは、自分が手にいれるように定められているものを獲得する才智にたけており、それを欲し求めるのであって、

この点から考えて、われわれはまた、「この世のすぐれた人びとのもっているエロスは、なにか特定のエロスではなく、普遍的なまことの善をめざすエロスである」ということを認めるとともに、

この点においても、エロスと近縁の関係にあるし、また自分も決して満足することがないのであるが、しかし(エロスと違って)或る部分的なものを善きものとみなし、その部分的な或るものを欲し求めるのである

「だが、別のダイモーンたちの配下に身をおく人びとは、このダイモーン、あのダイモーンと、時に応じて異なったダイモーンの配下に身をおき、その結果、自分の所有する普遍的なエロスを活動させずに放置し、ほかのダイモーンにしたがって活動するのであるが、彼らはその際、そのダイモーンを彼らのなかで活動している魂の部分と協和するものとして選んだのである」ということも認めなければならないだろう

だが、これに対して、劣悪なものを欲し求める人びとのばあいには、彼らのなかにあるエロスが、彼らのなかに生じた劣悪な欲望によってがんじがらめにされているのであって、それは彼らの生来の正しいことわりが、後から生じた劣悪な思いなしによってがんじがらめにされてしまうのに似ていると言えよう

人間はこの世においてダイモーンを選び、変え、支配することさえある

ただしその根拠は確固たるものではない

エロスには魂から生まれたものと人間が産出したものとがある

だが、自然に反したエロスはどうかというと、それらは堕落した魂の情念にすぎず、決して真実在でも真実在に類する独立存在でもなく、もはや魂から生まれたものではない

それらは魂の悪徳とともに生じてきたものであって、魂が自分の一時的もしく永続的な状態において産出した自己の類似物にすぎないのである

というのも、「真に善きものつまり規定されたもののなかで活動している魂の自然にかなっているものは真実在であるが、その他のものは魂から生まれた活動ではなく、たんなる情念にすぎない」ということが、一般に言えると思うからである

これに対して、本当に真実で永遠かつ一定不変の観念のばあいには、<思惟すること>と<思惟されるもの>と<真に在ること>とが完全に一致するのであって、このことは普遍的な思惟においてのみならず、個別的な思惟においても、思惟的対象が真実在であり個物者のなかの知性であれば、あてはまるのである

なお、誤った観念のばあいにも、これと同じことが言えるだろう。すなわち、誤った観念は真実在に基づいていないのである

人間の情念である

だから、われわれ各人のばあいにも、われわれの思惟活動と思惟対象の純粋性を確保することによって、われわれの思惟対象と思惟活動が一致するように、しかも端的に一致するように努めねばならないのである

したがってわれわれのエロスも、われわれの思惟活動と同じように、普遍的な諸存在にかかわるものである

普遍的観念のもとのエロスはすぐれたエロスである。ただし部分的なものを対象せざるをえない場合、それは付帯的なものとしてよい

そして、もしそのエロスがなにか部分的なものを対象とするなら、付帯的にそうしているにすぎない のであって、それはもし定理にしたがってこの特定の三角形の内角の和が二直角であるとしたら、それはその三角形が端的に三角形である限りにおいてであるのと同じである

8
だが(『饗宴』)のエロスの誕生の物語に登場する)ゼウスとは、何を意味しているのだろうか

「ゼウスの園」、それはプラトンの言によると、「ポロスがはいってきた庭」なのであるが、その「園」とは何を意味しているのだろうか

そこで、プラトンが『パイドロス』のなかで、この神を「偉大なる指導者」と呼んでいるから

ここでも、このプラトンの『パイドロス』のことばから、ゼウスの意味を把握するようにしなければならない

アプロディテとは、われわれにとっては魂のことであったし、ポロスが万有のロゴスであるということは、すでに述べられた

しかし、これら、すなわちゼウスとその園を何とみなすべきなのだろうか

——しかし、ほかのところでは、この神を指して「第三位のもの(『ピレボス』30d1)」と呼んでいるように思うけれども——

われわれはすでにアプロディテを魂とみなしたのだから、ゼウスを魂とみなすわけにはいかない

が、しかし、彼が『ピレボス』のなかで、「ゼウスのなかには王者にふさわしい魂と、王者にふさわしい知性がある」と述べる時、ゼウスの意味はさらに明らかになってくるのである

それゆえ、もしゼウスが偉大なる知性であり魂であって、諸原因の一つとしての地位が与えられ、その地位は高度のものとみなされる必要があるとすれば

ゼウスは知性の地位を占め、アプロディテはゼウスの娘で、ゼウスから生まれ、ゼウスと一緒に住んでいるのだから、魂の地位を与えられることになるだろう

というのも、男性神を知性の方に配置し、魂はそれぞれの知性と一緒に住んでいるのだから、女性神は各知性の伴っている魂の方に属するとみなすと、このばあいにも、アプロディテはゼウスの魂ということになるからである

9
それゆえ、ポロスとは知性界や知性のなかにあるもののロゴスのことであり、このロゴスが溢れ出、いわば拡散することによって、魂にただよりつき、魂のなかにはいりこんだ ということになるであろう

——というのは、ほかにもいろいろ理由はあるが、とりわけ「王者にふさわしい」という呼び名も「指導的な立場にある」という呼び名も、ともに「責任のある」という意味をもっているからだが——

——ちなみに、この女神はその美しさと輝かしさ、つまり魂の清浄さとハプロン(典雅さ)に基づいて、アプロディテとも呼ばれたのである——

それにまたこの解釈は、神官や神に詳しい人びとからも証明されているのであって、彼らはペラとアプロディテを同視し、天上に輝くアプロディテの星をヘラの星と呼んでいるのである(アリストテレス『宇宙論』392a28)

このアイデアはキリストのロゴス論に使える

つまり、知性の中身は凝縮していて、そのなかに他から何ものもはいりこむ余地はないのであるが、ポロスが酩酊してくると、その充実した状態は外からもたらされたものとなるのである

だが、あの知性界でネクタル(神酒)に満たされているもの(ポロス)は、すべては源から劣ったものでなかに落ちこんでいるのであり、ロゴスは外には考えられないのではなかろうか

だから、「アプロディテがたまたまそこにいるときに、このロゴスがゼウスの園に流れこんで、知性から魂のなかにはいりこんだ」のである

なお、園とは、その全体が富の栄光と飾りをあらわしているのであって、これに輝かしい光りを与えるのがゼウスのロゴスであり、この神の飾りが、知性自体から魂に流れ出た栄光となって(この園に)現れているのである

そして今や、これらのロゴスが一体となり、エウポリアー(豊かさ)つまり諸々の美のプルートス(宝庫)としての神ポロスの姿をとって現れてくることになるのであって、このことが、「ネクタルに酔っている」ということなのである

というのも、ゼウスの園とは、ゼウス御自身の聖像のことであり、その栄光の現れにほかならないし、ゼウスの栄光と飾りをあらわすものであるとすれば、ゼウス御自身から流れ出る諸々のロゴス以外に、これを考えることはできないのである

最高の位置にある知性

自己だけで充足している

ゼウス

流れ出し拡散するロゴス

知性につづく存在

ネクタルにより劣ったもののなかに落ち込んだロゴスであるポロス

魂に入りこむ

ロゴスを必要としている

というのも、神々の酒ネクタルとは、神に縁のあるものがこれを取り入れるものにほかならないからである

そして、知性の下に位置を占めているものはロゴスを必要とし、これを取り入れるのであるが、しかし、知性は自己自身だけで十分に満足しており、(外から)取りいれて酔うことはない

つまり知性は、外部からは何も取りいれはしないのである。しかし、ロゴスは知性の産物であり、知性につづく存在で、もはや知性そのものには属さず、ほかのもののなかにあるのだから、物語では「ゼウスの園に横たわっていた」と述べられているのであって、このロゴスが横たわっていた日が、ちょうどアプロディテが真実在の仲間入りをしたと言われる日にあたるのである

だがミュートス(物語)は、それが真に物語の名に値するものとならうとすれば、話の内容を時間的に区別しなければならない し、諸存在の多くが同じところに同時に存在しているばあいでも、そこに序列や力のちがいがあるばあいには、これを別に分けなければならない

——この点では、ロゴイ(論説)も不生不滅のものを生成させたりもすれば、やはりその論説自身が、一緒になって同時に存在しているものの間に区別を設けたりもするのである

——そして物語は、最善をつくして教え終えた後ならば、これを理解した者に、その区別したものを一つにまとめることを許すのである

そこでまとめてみると、次のようになる

そしていろいろな美しいもので飾られ、エウポリアー(豊かさ)に満ちているのだから、自分自身も美しくなっているのである

したがって、魂のなかには数々の栄光とありとあらゆる美の面影が見られるのであるが、この魂こそ端的に言ってアプロディテなのであり、そのなかにあるロゴスの全体がエウポリアーであり、あの上の領域にあるネクタルが流れ出ることによって姿を現したのがポロスなのである

かくして、これつまりエロスは、魂のすべて善きものに対する思慕から生まれたものとして、永久にその存立を得ていることがどうしても必然であり、魂のある限り、そこには常にエロスもあるのである

それゆえ、不足と思慕とロゴスの想い出とが魂のなかで一つになると、善きものに対する活動が生まれてくるのであって、これがエロスなのであるから、エロスはポロスとペニアから生まれたと言われているのである

ところが、ペニアとは貧困のことである

——というのは、善きものを思慕するもののなかには、いかなる形姿もロゴスもないからであるが——

だが、これに対して、善きものは、これを思慕するものに対しては純粋単一なる形相なのであり、これを受慕しようと希がうものは、やがてきたるべきものの(形相)に対する素材として、それを受け入れる準備を整えるのである

なお、魂のなかにある栄光は、生命のなかにあるのだからゼウスの園と呼ばれ、ポロスが酔いつぶれ、そこに眠っていたと述べられているのである

そして(アプロディテとしての)生命が現れ、永久に真実在の世界に居を占めるようになると、神々はそれにふさわしい幸せを享受することになるので、「饗宴をひらいた」と述べられているのである

そしてこのエロスは(豊かさと貧しさ、つまりポロスとペニアの)混じり合っているもので、充足されることを希う点では不足(貧しさ)にあずかっているのであるが、すでに所有しているものの足らざるところを探し求めるという点では、豊かさに縁のないものではないのである

というのも、事実、善きものにまったく縁のないものは、決して善きものを求めることはないからである

だが、このばあい、思慕はつねに不足の状態にあるものがこれをもつのであるから、エロスの母はペニアであるということになる

なぜなら、素材もすべてを欠いているものであるし、善きものに対する欲望のもとは無規定なるものであって

これが、思慕するものをその思慕の程度に応じて素材的なものとするからである

まことに、右のような次第であるから、エロスは素材のようなものであって、それは魂が善きものを欠いているが、これを求め思慕するも限りにおいて、魂から生まれてきたダイモーンであるということになる